



マツホド

Wolfiporia cocos Ryvarden et Gilbertson サルノコシカケ科 (Polyporaceae)



生薬名: ブクリョウ(茯苓) 薬用部位: 菌核

アカマツやクロマツなどのマツ属植物の根に主に寄生する真菌で、大きい菌核になると直径30cmにもなります。主に中国東南部にて栽培され、日本にも自生しています。生薬「ブクリョウ」は本種の菌核で、通例、外層をほとんど除いたものです。利尿^{※1}、健胃^{※1}などの作用が期待され、一般用漢方製剤294処方のうち、五苓散(ごれいさん)など93処方に配合されています。



※1 原島広至. 改訂第3版 生薬単 (ショウヤクタン) ～語源から覚える植物学・生薬学名単語集～. 伊藤美千穂, 北山隆監修. 東京, 丸善雄松堂株式会社. 2017, 361p.



マツリカ

Jasminum sambac (L.) Aiton モクセイ科 (Oleaceae)



アラビアからインドにかけて分布する常緑半蔓性低木です。熱帯圏では一年中開花が見られ、花は夕方から早朝に開きます。本種には耐寒性がないので我が国では冬季に温室へ搬入します。和名のマツリカは、漢名の「茉莉花」を日本語読みしたものです。花を乾燥した「茉莉花」にはリナロールが含まれ、中国では薬用に用いられるようです。乾燥した花をウーロン茶と混ぜたり、緑茶と混ぜたものなど地域によって様々なジャスミンティーが存在します。その他の国でもインドでは花を香料の原料に用いて、フィリピンでは国花として親しまれています。





マテチャ

Ilex paraguayensis A.St.Hill. モチノキ科 (Aquifoliaceae)

パラグアイからブラジルにかけての山岳地帯に分布する常緑小高木で高さ6～15mに達し「マテチャノキ、パラグアイチャノキ」とも呼ばれます。本種は冷涼な気候を好み、気温の高い海岸地域には見られません。茎葉にはカフェイン、テオブロミン、タンニンを含み、主に「マテ茶」の原料として栽培され、体力増強^{※1}作用を有します。ほとんどが南米で消費され、その他の地域ではあまり利用されません。呼び名の「Mate」とはペルーのケチュア語でヒョウタンの意味があり、このヒョウタンの器にマテ茶を入れて飲むことから呼ばれています。



※1 アンドリュー・シェヴァリエ, 世界薬用植物百科事典 日本の薬用植物のすべて, 難波恒雄監訳, 東京, 株式会社誠文堂新光社, 2000, 334p.



マンゴー

Mangifera indica L. ウルシ科 (Anacardiaceae)



インド北部からビルマにかけて分布する、高さ15～30mの常緑高木です。インドでの起源は古く4000年も前から生産されています。生薬名を「モウカ(欒果)」と称し、果実にはマンギフェリン(mangiferin)が含まれ、鎮咳※¹、健胃※¹作用があります。ただし、ウルシ科に属するため、かぶれに注意が必要です。本植物は、チェリモヤ (*Annona cherimola* Mill.)や、マンゴスチン (*Garcinia mangostana* L.)とともに世界三大美果の1つに数えられており、現在、メキシコ・フィリピン・タイ・台湾などが主な生産国です。日本には明治時代に伝えられ、現在は沖縄県・宮崎県・鹿児島県などが主産地です。開花期が梅雨時期と重なり結実率が低下するため、ハウス内で栽培されています。一般に果実は完熟前に収穫しますが、ネット内に自然落下させたものは「完熟マンゴー」と称して高級品になります。



※1 蕭培根主編，真柳誠翻訳編集。中国本草図録 巻1。大塚恭男，庄司順三，滝戸道夫，丁宗鐵監修。東京，中央公論社。1992，278p.



マンネンロウ

Salvia rosmarinus Schleid. シソ科 (Lamiaceae)



地中海沿岸に分布する常緑低木です。和名のマンネンロウよりもハーブ名のローズマリーの方が一般的に知られています。殺菌効果があることから、西洋料理では肉料理の香辛料として用いられます。生薬名を「メイテツコウ」といい、全草にロスマリン酸などを含み、健胃^{※1}、鎮痛^{※1}、駆風^{※1}作用があります。



※1 相賀徹夫. 中薬大辞典 第四巻. 東京, 株式会社小学館. 1985, 2817p.



ミシマサイコ

Bupleurum stenophyllum (Nakai) Kitag. セリ科 (Apiaceae)



(局方)*Bupleurum falcatum* Linné セリ科(Umbelliferae)

生薬名:サイコ(柴胡) 薬用部位:根

日本の本州中部地方以西に分布する多年草です。草丈70～120cmになり、8～10月に花を咲かせます。生薬「サイコ」は本種の根で、サイコサポニンなどの成分を含み、消炎※1、解熱※1などの作用があります。胸から脇にかけて膨満し、圧迫感があって、苦しい状態の胸脇苦満(きょうきょうくまん)の改善にも柴胡剤が用いられます。一般用漢方製剤294処方のうち、小柴胡湯(しょうさいことう)、補中益気湯(ほちゅうえっきとう)など43処方に配合されています。



※1原島広至. 改訂第3版 生薬単 (ショウヤクタン) ～語源から覚える植物学・生薬学名単語集～. 伊藤美千穂, 北山隆監修. 東京, 丸善雄松堂株式会社. 2017, 361p.



ムラサキ

Lithospermum murasaki Siebold ムラサキ科 (Boraginaceae)



生薬名: シコン(紫根) 薬用部位: 根

日本、中国、朝鮮半島に分布する多年草で山地や草原に生育し、草丈30～60cmになります。生薬「シコン」は本種の根で、シコニン(ナフトキノン類)などの成分を含み、創傷治癒促進^{※1}などの作用があります。一般用漢方製剤294処方のうち、紫雲膏(しうんこう)、紫根牡蛎湯(しこんぼれいとう)の2処方に配合されています。紫雲膏は、外傷^{※2}、火傷^{※2}、湿疹^{※2}、皮膚炎^{※2}などの皮膚疾患に軟膏として広く利用されています。和名は、根の色が濃紫色を呈することに由来します。律令制度が制定された時には官吏の階級(冠位十二階)を冠の色によってそれぞれ区別しました。最も高位である徳冠の紫色は本種の根で染めた色と考えられています。本種の野生株は激減しており、環境省レッドリスト2017では絶滅危惧ⅠB類(EN)に選定されています。



※1 原島広至, 改訂第3版 生薬単 (ショウヤクタン) ～語源から覚える植物学・生薬学名単語集～, 伊藤美千穂, 北山隆監修, 東京, 丸善雄松堂株式会社, 2017, 361p.

※2 参考: 一般用漢方製剤製造販売承認基準について, 平成29年3月28日薬生発0328第1号, 厚生労働省医薬・生活衛生局, 59p.

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11120000-Iyakushokuhinkyoku/0000160072.pdf>.



ムラサキバレンギク

Echinacea purpurea (L.) Moench キク科 (Asteraceae)

北米原産の多年草で、耐乾性、耐寒性、耐暑性などがあり、極めて育てやすい植物です。草丈は60～100cmになり、初夏から晩秋まで赤紫色の花を咲かせます。和名は、開花終盤に15枚ほどの舌状花(外見上の花びら)が垂れ下がり、その形が「バレン」と呼ばれる「火消しのまとい」に似ていることに由来します。根に免疫活性^{※1}作用があります。



※1アンドリュウ・シェヴァリエ, 世界薬用植物百科事典
日本の薬用植物のすべて, 難波恒雄監訳, 東京, 株式会社誠文堂新光社, 2000, 334p.



メギ

Berberis thunbergii DC. メギ科 (Berberidaceae)



生薬名: ショウバク(小蘗) 薬用部位: 木部

本州、四国、九州に分布する落葉低木で、山野に見られます。生薬「ショウバク」は、ベルベリン(berberine)を含み、その語源は、メギ属(*Berberis*)に由来します。また、生薬名の「小蘗」は、小型のキハダという意味です。和名のメギは「目木」の意味で、枝や根を折って水で煎じると液が黄色なり、苦味健胃^{※1}、殺菌^{※1}作用があることから、目の病気の時に煎じた液で洗眼したことから名付けられました。別名の「コトリトマラズ」は枝が多く、棘があり小鳥も止まれない、「ヨロイドオシ」は鎧も通すなどの意味がそれぞれあります。



※1 岡田稔, 布目慎男, 寺林進, 三木栄二編集. 原色牧野和漢薬草大図鑑. 三橋博監修. 東京, 株式会社北隆館. 1988, 782p.



メタセコイア

Metasequoia glyptostroboides Hu et W.C.Cheng ヒノキ科 (Cupressaceae)



中国固有の落葉高木で、樹高30～40mになる1属1種の植物で、別名を「アケボノスギ」と称します。学名は、三木茂博士(京大・理)が日本で出土した化石に命名されたもので、1943年に中国四川省で生存するものが発見され、1948年に新種として発表されたことから、「生きた化石」と呼ばれています。その後、種子から育成された苗が世界中に配布され、当植物園にはそのうちの1本を1950年に植栽しました。メタセコイアは雌雄同株で、幹の上位(1/5程度)に雌花が、それより下位に雄花を着けます。

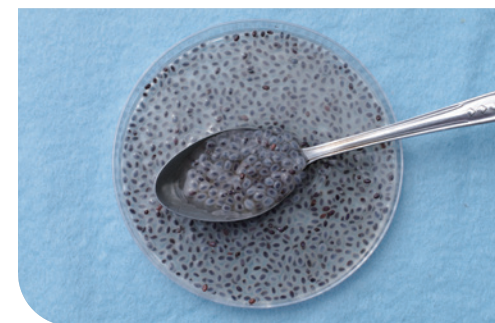




メボウキ

Ocimum basilicum L. シソ科 (Lamiaceae)

インド原産で、アジア南部、中東などに分布する一年草です。高さ30～60cmで、よく分枝します。盛夏から秋の中頃にかけて白色の花を咲かせます。日本には、江戸時代に中国から薬用として入ってきました。全草に利尿^{※1}、通経^{※1}作用があります。小さな黒い種子を目の中に入れると、水分を吸って蛙の卵のように寒天状に膨れて目のゴミを拭い去ったことから、「目の箒(ほうき)」にちなんで和名が付けられました。現在では、トマトとの相性がよい香辛料としてはもちろん、このバジルを使ったジェノベーゼ・パスタなどの地中海料理に生葉が用いられ食卓を飾っています。



※1 難波恒雄. 原色和漢薬図鑑(下). 大阪, 株式会社保育社. 1980, 521p.



モミジバダイオウ

Rheum palmatum L.



生薬名:ダイオウ(大黃) 薬用部位:通例、根茎

ダイオウは、中国を中心に古来より緩下剤として、広く繁用されてきた重要生薬です。ジアントロン類のセンノシド A、アントラキノン類のレイン、エモジンなどを含み 緩下^{※1}、駆瘀血^{※1}などの作用があります。一般用漢方製剤294処方のうち、大黃甘草湯(だいおうかんぞうとう)、乙字湯(おつじとう)など35処方に配合されています。



※1 原島広至. 改訂第3版 生薬単 (ショウヤクタン) ~ 語源から覚える植物学・生薬学名単語集~. 伊藤美千穂, 北山隆監修. 東京, 丸善雄松堂株式会社. 2017, 361p



モモ

Amygdalus persica L. バラ科 (Rosaceae)



(局方)*Prunus persica* Batsch

生薬名: トウニン(桃仁) 薬用部位: 種子

中国西北部黄河上流地域に分布する落葉小高木で、果樹として広く栽培されます。花は前年に伸びた枝の葉腋に付き、4月に咲きます。「モモ、クリ3年、カキ8年」という諺が示す通り、芽生えてから比較的早く実を結ぶ果樹です。種子にはアミグダリン(青酸配糖体)などを含み、消炎^{※1}、抗菌^{※1}作用があります。一般用漢方製剤294処方のうち、桂枝茯苓丸(けいしぶくりょうがん)、甲字湯(こうじとう)など16処方に配合されています。



※1 原島広至. 改訂第3版 生薬単 (ショウヤクタン) ～語源から覚える植物学・生薬学名単語集～. 伊藤美千穂, 北山隆監修. 東京, 丸善雄松堂株式会社. 2017, 361p.